

## 山の神 (牛頸井手地区)

大野城市教育委員会



昭和43年2月までは牛頸区として統合されていた牛頸地域も、人口の飛躍的な増加に伴い、現在は牛頸・平野台・月の浦・南ヶ丘Ⅰ・南ヶ丘Ⅱ・つつじヶ丘の6つの行政区に分割され、大規模な山林の開発とともに今でも住宅地の造成が続いています。

市街地化が進んだ現在では信じられませんが、牛頸が純農村地帯だった頃は、山奥と思われてい

ました。実際、牛頸への行き道は人気や街灯が無く、怖かったという話を聞きます。ところが、地域内の人々にとっては肥沃な土地があり、豊富な水を確保できる場所にあつて、天狗様や山の神様、猿田彦大神といった神々を大切にお祀りすることで自分達は守られている。といった感覚があつたそうです。そのため自分達を守ってくれる神様を尊び、数多くの史跡を残してきました。この解説シートでは、井手地区で行なわれている「山の神」について紹介します。

### 山の神

大野城市内では牛頸と乙金の山麓地で山を支配する神として信仰されてきました。現在では守られてはいませんが、かつては特に1月14、24日は女性神である山の神様が洗濯をする日なので、誰も山に入らなかったそうです。もし入つたならば、必ず怪我をするといわれていました。

現在祠は、2度の移転を経てつつじヶ丘6丁目（牛頸ダム堤防横）に建っています。移築は必ず現在地よりも標高の高い場所で行なわなければならないそうです。

毎年10月17日と10月20日には、井手地区の八軒から戸主が出席し、神事がとりおこなわれます。





しめ縄を懸け渡す様子

### <おしめ打ち> 10月17日

午前八時半に各家の戸主が山の神の祠に集合し、古いしめ縄をはずし燃やす。新しい藁でしめ縄を織り、祠とご神木に懸け渡す。しめ縄は左廻りに織り、途中に七・五・三本のしめ縄(藁)と紙垂(和紙)を下げる。ご神体である石に拝礼した後、直会となる。甘酒(女神であるためアルコール度の低いもの)・干しあご2匹・酢の物・黒豆・煮しめ(7品を串に刺して2本)・赤飯を当番が用意する。神様と供食ののち、今年の収穫などの話しをして、お開きとなる。



拝礼している様子

### <お座> 10月20日

その年の当番宅で行われ、各家の戸主が和装で出席する。今年午後六時に始まった。

当番が、おしめ打ちが無事終了したことに礼を述べ、全員で御神酒をいただいたあと、会食となる。料理は汁物・酢の物・刺身・はち盛り・山芋・ご飯がならぶ。おひら(土産)はかまぼこが3本ときまっている。

最後に祝めでたを歌い、トウワシが行われる。今年の当番が来年の当番へお酒を注ぎ、来年の当番が飲み干す。この時、盃として大きなカワラケが使われていた。



山の神様との直会の様子

会食の途中には、今年も井手地区の人々が無事に暮らせたことにたいする感謝と、この風習を継承していきたいという思いが、何度となく語られた。

山の神の神事が途絶えてしまった地域もあります。井手地区でも一度断絶しましたが、災いが起こったことから復活しました。この神事が継承できた理由のひとつに、裏方である女性の理解があげられます。山の神は女神といわれ、参加できるのは男性と決まっていました。しかし、女性の協力なしには成立しないことも事実です。女性の「山の神」は、神事に使う食器が渡された10月21日から始まります。



当番宅での会食の様子

文化を伝承することは、様々な苦労や困難を伴います。しかし、祖先を敬う気持ちと、また、世代交代が行われる中で、いろんな年代の人たちが一同に会し、お互いを尊重する気持ちが強かったのでしょう。井手地区では今でもこの神事が大切に続けられています。